

# 東京音楽大学リポジトリ

## Tokyo College of Music Repository

教養教育におけるスポーツと音楽：  
—イギリスのパブリック・スクールと旧制高等学校  
の考察—

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-04-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 下道, 郁子, Shitamichi, Ikuko メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/1325">https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/1325</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 教養教育におけるスポーツと音楽

## —イギリスのパブリック・スクールと旧制高等学校の考察—

下道 郁子

### 1. はじめに

本研究は、教養教育を理念としたイギリスのパブリック・スクールとそれを範とした日本の旧制高等学校において、スポーツが重視され、それが学生の音楽活動に与えた影響を考察するものである。とりわけスポーツ試合の為に作られた歌の考察を通して、スポーツと歌の関係及び学生が集団で歌うことの意義を検討する。既に本研究者は拙論「寮歌の形成過程と文化的背景：『花は桜木』から『都ぞ弥生へ』」（2013）で、旧制第一高等学校（以下一高と記す）において、明治20年～30年代に発表されたスポーツと音楽活動を比較した文章や、また寮歌の歌詞に現れたイートン・カレッジ（Eton College）との関わりについて言及した。本研究はこの部分を引き継ぎながら、新たに近代オリンピックの父と呼ばれ、イギリスのパブリック・スクールの教育に感銘を受けたという、フランスのピエール・ド・クーベルタン（Pierre de Coubertin 1863-1937）の教養教育理念を背景とする。

2020年東京で開催されるオリンピック競技大会（以下オリンピック）に向けて、様々なオリンピック・ムーブメントが行われている昨今である。今やオリンピックは世界最大のスポーツの祭典という枠を越え、一大文化イベントである。一方で、各国のメダル獲得数や国の威信をかけた「国家間の闘い」といった政治的な要素も否めない。このような発展の中では、近代オリンピックがクーベルタンの教育的意義の提唱から始まったことなど、人々の関心事からは追いやられしまった感さえあえる。

しかし第4回のロンドンオリンピック（1908）でアメリカとイギリスの対立が激化した時、当時のIOC会長のクーベルタンが「勝つことではなく、参加することに意義があるとは、至言である。人生において重要なことは、成功することではなく、努力することである。根本的なことは、征服したかどうかにあるのではなく、よく戦ったかどうかにある。」というメッセージを発信した<sup>1</sup>。これはオリンピックが勝敗という結果ではなく、理想の人間形成の過程に関わるという教育的な活動であることを意味している。このようにオリンピックと教育は、本来根本的に結びついたものである。オリンピックが本来は「理想の人間形成」の場であり、競技用に訓練された特別な人間による競い合いの場ではなかった。

「理想の人間形成」は古代ギリシャの教育思想に遡る。プラトンの『国家』（1979）に、

---

1 「日本オリンピック委員会」<https://www.joc.or.jp/olympism/coubertin/>によると、このメッセージはロンドンオリンピック開催中に礼拝の為にセント・ポール寺院に集まった選手を前に主教が述べた戒めの言葉であった。

国の守護者の教育として身体のためには体育が、魂の為には音楽文芸があると述べられているように、人間形成にはスポーツと音楽の両方の教育が不可欠と考えられてきた。1912年のストックホルム大会から1947年のロンドン大会までの計7回、正式に芸術競技が実施されたのも、クーベルタンのオリンピック教育の理想の実現であったと言えよう。その後、芸術競技は文化プログラムへと発展していき、オリンピック憲章の根本原則には次のように謳われている（日本オリンピック委員会 2018：10）。

オリンピズムは肉体と意志と精神のすべての資質を高め、バランスよく結合させる生き方の哲学である。オリンピズムはスポーツを文化、教育と融合させ、生き方の創造を探求するものである。その生き方は努力する喜び、良い模範であることの教育的価値、社会的な責任、さらに普遍的で根本的な倫理規範の尊重を基盤とする。

しかし近年の文化プログラムの発展も、経済や国家の威信と結びつき、教育的という側面からは、大きくかけ離れてしまっている。本研究はこのような現状を出発点とし、スポーツとそれに関連した音楽文化活動、特に応援歌等に代表される「集団で歌うこと」の意義や役割を、教育という視点から考察することを試みる。日本では甲子園の歌があり、試合に勝った高等学校は校歌を歌う習慣がある。多くの大学が応援歌や応援団をもち、ブラスバンドや歌唱等、音楽が登場する場面は多い。音楽はスポーツ競技において、何か重要な役割を担っていると考えられる。

本論文では、まず近代スポーツ競技の教育的意義とその発展における学校の役割を、イギリスのパブリック・スクールと日本の旧制高等学校を例に考察する。そして学校の音楽文化がスポーツと結びついて発展してきた例として、各学校の代表的なスクールソング、寮歌、応援歌等に注目し、教養教育、スポーツ、音楽の関係を検討していく。

## 2. 近代スポーツとイギリスのパブリック・スクールの教育

近代スポーツの教育的意義や役割については、示唆に富むいくつかの研究がある。ナウルの『オリンピック教育』（2016）は、オリンピックを教育と位置づけ、歴史を概観し、教育の推進、教育学的概念、教授法、評価等について論じている。現代の教育の現状を分析して問題提起を行い、現場での実践的な解決策が提案された教科書タイプの著作である。オリンピック教育の歴史の章では、クーベルタンのオリンピズムの教育的思想が、第一次と第二次の二つの大戦、ナチス、社会主義国の台頭、東西冷戦等の政治の影響を受けて、どのように変容したのかを時系列に沿って解説している。

ここで注目したいのが、クーベルタンが19世紀のイギリスのパブリック・スクール<sup>2</sup>の教育

---

2 イギリスの一般に開かれた寄宿制の私立中等教育学校で、ウィンチェスター校、ウェストミンスター校、イートン校、ハーロー校、チャーターハウス校、ラグビー校、シュルスベリー校などが有名である。

の影響を強く受けたといふ記述である。クーベルタンは12歳のときに、トマス・ヒューズ (Thomas Hughes, 1822-1896) の文学作品『トム＝ブラウンの学校生活』(1952)のフランス語訳を読んでいた。この本は英国パブリック・スクールの学校生活を描いたもので、著者のヒューズはラグビー校に1834年から1841年まで在学しており、この時の校長が、トマス・アーノルド (Thomas Arnold, 1795-1842) であった。アーノルドはパブリック・スクールの教育の改革者として知られているが、その一つがスポーツに教育的価値を認めたこととされている。クーベルタンはアーノルドを「スポーツ教育の祖」として崇めていた。しかしアーノルドは教育の目的を第1に魂の救済、第2にモラルの開発、第3に知性の発達と考えており、この教育理念がアスレティシズム<sup>3</sup>と結びついたのであって、彼自身が運動競技に熱心だったわけではなかった。『トム＝ブラウンの学校生活』で描かれたアーノルドが「スポーツ教育の祖」と神格化された理由について、鈴木は「少年達とスポーツ活動との深い結びつきを極めて印象的に描いたが故にこの小説は、作者のヒューズがラグビー校に学んでいた時期に校長であったトマス・アーノルド (Thomas Arnold) を、スポーツに初めて教育的な価値を見出して積極的に奨励した『スポーツ教育の祖』として神格化する上で大きな役割を果たすことになった。」と述べている (鈴木 2004: 43)。

パブリック・スクールではクリケット、フットボール、ボートなどの集団スポーツに教育的価値が見いだされた。協調性、集団への忠誠心、忍耐などが培われ、教養教育の理念の象徴でもある「人間形成」のための教育効果が注目されたのである。池田は自身のリース校 (The Leys School) の留学経験をもとに『自由と規律』(1949)でパブリック・スクールの教育全般について紹介しているが、スポーツは独立した章を設けて述べられている。池田はパブリック・スクールでは個人競技より団体競技が重視されている理由を「一定の目的に対し心身を集中させる訓練の手段として、きわめて重要な役割を占めている」と述べ、続けて「共同体にあって全体の利益のため自我を没し、勝って驕らず負けて悪びれず、敵を重んじ、苟も不当の事情によって得た有利な立場に拠って勝敗を争うことを潔しとしない、いわゆる『スポーツマンシップ』を修得するものとされている」と述べている (池田 1949: 147-148)。

中でもフットボールは盛んで、各々のパブリック・スクールで独自のルールを設けていた。今日のラグビー競技は中世イングランドを起源とし、村と村との対抗戦として行っていた原始フットボールが源流で、歓声がうるさく死者も出ていたという。実態は蹴るだけではなく、手も使う「ボールの奪い合い」であり、禁止令がでたこともあったが、大衆が熱くなって参加する人気行事であった。この「ボールの奪い合い」のルール化が、良家の師弟が通うパブリック・スクールで行われ、教養教育の一貫としてのスポーツへと進化していった。ラグビー校 (Rugby School) の生徒であったエリスという少年がうっかりボールを抱えて走ってしまったことがラグビー競技のルーツと言われる。イートン校ではラグビーではなくフットボールが

---

3 訳語や意味については議論があるが、一般にスポーツへの関心と積極的な参加という意味で使用されている。

行われ、ハーロー校 (Harrow School) が「ハーローフットボール」と呼ばれる独特なフットボールを行っているのは、スクールごとに独自にルール化した結果である。

上述したようにイギリスは中世の頃から民衆レベルでの競技が盛んであった。その荒唐無稽とも言えるお祭り騒ぎに、一定のルールを設けて進化させたのが、近代スポーツである。この過程において、パブリック・スクールの存在は大きかった。19世紀後半のイギリスでは、競技に勝つために訓練され、スポーツによって対価を得るプロフェッショナルは労働者であり、人間形成のためにダンスや演劇等の文化活動も嗜みながらスポーツをするアマチュアはジェントルマンであった。つまりパブリック・スクールにおいて教育目的で行われたスポーツは、イギリスの階級文化の象徴でもあった。

### 3. 『トム=ブラウンの学校生活』に描かれた試合の夜の歌会

前項で言及した『トム=ブラウンの学校生活』は19世紀半ばのラグビー校の生活を描いたものである。第6章「試合終わって」の中で、生徒達が集団で歌唱する場面が詳細に描かれている。それは主人公トムが初めてフットボールの試合を見学した日の夜のことであった。友人イーストがラグビー校では、毎学期の最後の6回の土曜日に歌を歌うきまりになっていると、トムに話して聞かせる。それに対してトムが「しかし誰が歌うの」と聞くと、イーストは「そりゃ無論、皆が歌うのさ、じきにわかるよ。夕食がすむと早速はじまって、就寝時まで続くのだ。」(ヒューズ 1952:142)と答える。歌の催しは夕食後に食堂のテーブルを馬蹄形にセッティングし、その上にビールのジョッキを並べることから始まる。年長の生徒らが、瓶ビールと歌集を抱えて入室し、着席する。歌は誰もが覚えているが、歌を丁寧に書き写した古い写本が、先輩から伝わっている。新入生は順次テーブルの上に立たされて、独唱させられる。皆が揃うと、ビールがジョッキに注がれ、リーダーの生徒が開会の歌である舟歌で先導し、70人の声が調子を合わせるのではなく、大声を出すことに懸命になる。その後〈英国近衛第一連隊〉〈ビリー・テイラー〉〈セリングバタムの包囲〉〈3人の愉快的郵便屋さん〉〈チェサピー号とシャノン号〉〈勇敢なるブルック〉と歌い、ひとしきり歌うとビールを注ぎ足し、その日のフットボールの試合の主将である上級生ブルックの演説が始まる。演説の内容は自分の寮の優越性や寮の仲間への団結の強さ、校長や学校への意見、愛校心等である。その後また歌が始まり〈蛍の光〉が歌われるが、「それは途方もなく騒々しい行事で、歌ってる間に、幾度テーブルの上に片足で立ったか、ジョッキを打合はしたり握手をし合ったりしたかわからないくらいであった。こういう伴奏がないと、英国の少年らはこの有名な古歌を合唱することが出来ないものと見える。」(前掲書:p.154)と描かれている。〈蛍の光〉の進行中に9時半の時報が打たれ、催しは終わり、各自が自分の歌集とジョッキを抱え、片付けが始まるが、歌のすきな連中は〈ゴット・セイヴ・ザ・キング〉を長々と歌っている。9時45分にお祈りを告げる鐘が鳴る。お祈りが済むと、トムはイーストからその夜、上級生がベッドに入る前に毛布で吊り上げにくると教えられる。10数人の上級生が寝室から引きずり出した毛布を下級生をくるんで吊り上げ、振り回す。監督生

がやってきて吊り上げは中止となり、各自の部屋に飛び込む。

以上のように『トム＝ブラウンの学校生活』ではトムのパブリック・スクールでの第一日の経験として、フットボールの試合の見学から始まり、歌の催し、そして上級生からの蛮行が描かれている。

#### 4. ヴィクトリア・エドワード朝のパブリック・スクールのスポーツと詩

『トム＝ブラウンの学校生活』はヴィクトリア・エドワード朝と呼ばれる時代のパブリック・スクールの様子を描いている。ヴィクトリア・エドワード朝とは1837年のヴィクトリア女王 (Queen Victoria, 1819-1901) の即位からエドワード7世 (Edward VII 1841-1910) までの治世のことである。産業革命が収束し、第一次世界大戦が勃発するまでの時期で、イギリス史では「近代」とみなされている。J.マンガン (J.A.Mangan) はヴィクトリア・エドワード朝におけるイギリスのパブリック・スクールの運動競技に関する研究の中で、スポーツを詠う作詩活動について考察している。

マンガンはスポーツを詩にすることは、ヴィクトリア・エドワード朝の中・上流階級の顕著な特徴であると述べている (Mangan 2000: 179)。スポーツを詠う詩は文学的な質は問題ではなく、その目的はイデオロギーの普及のための主張であり、勧告であり、賛歌であった。マンガンの著書では主にパブリック・スクールの中でもスポーツが盛んなハーロー校が例に調査されている。ハーロー校はイギリスのチャーチル首相 (Winston Leonard Spencer-Churchill, 1874-1965) やインドの初代首相であるジャワハルラル・ネルー (Jawaharlal Nehru, 1889-1964) を輩出した名門校である。

1885-1898までハーロー校の校長であったジェームズ・ウェルドン (James Welidon, 1854-1937) は、「ハーロー校を知らない人が、この名門校の本質を学びたいと思うなら、歌を調べるのがよい」(前掲書: 180) と述べている。ハーロー校の歌の多くは、1859年から1901年まで教師を務めたボーエン (Edward Ernest Bowen 1836-1901) が作詩をしている。彼は熱心なスポーツマンで徒歩旅行の推進者でもあり、進歩的な教育を行った教師であった。とりわけ現在でも歌われ続け、ハーロー校の校歌の役割を果たしている代表歌“Forty Years On”(譜例1)の作詩者として有名である。

ハーロー校はパブリック・スクールの中でも特に歌に熱心で、有名な歌集を持っている。ハーロー校のホームページでも課外活動としての“MUSIC”のページで、歌集について説明がある (Harrow School ホームページより)。

ハーロー校に独特なことは、その有名な歌集である。過去から現在までの教師が学校のために特別に書いた50以上の歌が含まれている。これらの歌はハーロー校の生活の重要な部分であり、学期末コンサート、ハウスイベント、オールドハロヴィアンイベント、年に1度スピーチルームで、5年に1度ロイヤルアルバートホールで歌われます。

この歌集の第21版（1905？）を見ると、1861年からの46曲の譜面付きの歌と、71の歌詞が収録されている。ポーエンの書いた41の歌のうち26の歌が試合の為に書かれている。詩の多くは、身体活動の高潔さや、努力を要する生活を讃える人生哲学を詠い、当時の上流階級の教育理念を代弁していた。マンガンはハーロー校の歌は、娯楽以上の何かであり、パブリック・スクールの精神を示したものであると述べている。

1860年から1930年の約70年間、ハーロー校の他に、アッピングガム（Uppingham School）、マルボロ（Marlborough College）、ランシング（Lancing College）等の学校では校長、教師、生徒、卒業生等により、競技や試合にまつわる詩や歌や論考が書かれ、学校誌に掲載された。精神やイデオロギーを言葉でシンボル化することに教育的意義が見いだされていた。考えを形にし、感情を動かし、意思や行動を方向づける力が言葉にはあり、グループやコミュニティに影響を及ぼすことが理解されていた。団結、アイデンティティ、愛国心、そして道徳が言葉によって表現された。

マンガンの研究から、アスレティズムを言葉にすることが、パブリック・スクールでの歌の活動の発展に影響したと考えられる。パブリック・スクールには礼拝堂があり賛美歌を歌う習慣もあるが、それとは異なる歌う活動が培われたのであろう。それは教養教育におけるスポーツと言葉と音楽が融合してなし得た、学校の音楽文化であった。

## 5. ハーロー校とイートン校のスクールソング

ここでハーロー校とイートン校のスクールソングを考察したい。スポーツに関してハーロー校はフットボールで、イートン校はボートで有名であるが、どちらも音楽教育<sup>4</sup>に熱心で有名な歌を持っている。これらの歌は日本の校歌と類似した役割を担っているが、成り立ちが異なるので、本稿では校歌と呼ばずにスクールソングとする。

### 5.1 ハーロー校 “Forty Years On” (譜例 1)

ハーロー校を代表するスクールソングは先に述べた“Forty Years On”である。1872年の作で、作詞は教師ポーエン、作曲は作曲家でオルガニストであり、1882年から1865年までハーロー校の音楽教師を務めたファーマー（John Farmer, 1835-1901）である。集会や儀式の最後に歌われる歌であるが、“Auld Lang Syne”<sup>5</sup>とイギリス国歌“God Save The Queen”〈女王陛下万歳〉の2曲が、この後に続けて歌われるという習慣がある。

歌詞は4節から成る。第1節は卒業40年後に再会し、懐かしく共に歌う気持ち、第2節は40年前の在校時代の苦悩を乗り越えたことを、フットボール競技の苦しみに重ね、第3節は40年前のフットボールの試合の素晴らしさと喜び、第4節は40年経って身体は弱ったがさらに目標

---

4 パブリック・スクールは男子校ということもあり、音楽は教科として存在せず、課外活動であった。現在のハーロー校は共学であり、音楽は教科としてカリキュラムの中に位置づけられている。

5 〈蛍の光〉の原曲。

に向かって進む強さをフットボール競技に例えて歌っている。各節の後には“Follow up!...Till the field ring again and again, With the tramp of the twenty-two men, Follow up!”とコーラスがつく。“With the tramp of the twenty-two men”の22人は、ハーロー校に伝わる独自のフットボールの22人の選手を意味している。

この歌の詩はフットボールの試合が基盤になっている。しかし歌われるのは、試合の時だけではなく、スクールソングとして学校行事の節目で歌われる。歌詞は在学中から卒業後40年までの人生を、フットボールの試合に擬えており、試合の応援歌を超えて、卒業生への人生の応援歌となっている。またこの歌は歌詞が替えられて、イングランドをはじめ、ニュージーランドや南アフリカ共和国の中等教育の学校の校歌（school anthem）になっている。

## 5.2 イートン・カレッジ “Boating Song” (譜例 2)

イートン・カレッジには公式のスクールソングとして“Carmen Etonense”がある。しかし“Boating Song”が学期末や学校行事の節目で歌われる代表歌となっている。ボートを漕ぐ時にも歌われる。同校の卒業生で教師となり、詩人でもあったジョンソン（William Johnson Cory 1823-1892）が詩を作り、それをインドの連隊に勤務していた卒業生で彼の生徒でもあったダルモンド（Captain Algernon Drummond 生没年不明）に送り、作曲を依頼した。

歌詞は5節から成る。第1節と第2節は、快晴の下、ボートを漕ぎながら眺める自然の風景や川の水の様子、そして晚餐のワインが詠われている。第3節は“Harrow may be more clever, Rugby may make more row”と、同じ名門のパブリック・スクールであるハーロー校とは勉強の程度を、ラグビー校とはボートの運動能力を比較して、劣っているかもしれないが謙遜し、しかし自分たちはボートを漕ぎ続け、人生は断たれることなく続き、鎖で一続きになっていると、強い団結心を詠っている。第4節と第5節は、卒業後20年を想定し、その頃でも競技を思い出し、若い頃の自分を失わず、イートンに誇りをもち、イートンのボートチームを応援し、身体の動きが遅くなってもひたすら漕ぎ続ける、といった内容である。ボート競技に人生や仲間意識、愛校心を読み込んでいる。この歌も多くの替え歌がある。例えばイングランドのコヴェントリーに本拠地を置くサッカークラブコヴェントリー・シティ FC の公式歌“Sky Blue Song”になっている。

ハーロー校とイートン校のスクールソングを考察すると、スポーツ競技の歌でありながら、協調性、集団への忠誠心、忍耐 団結、努力し続けることの大切さ等の人生哲学、そして愛校心や生徒であることの誇りが歌われていることがわかる。その結果、学校の代表歌となり、試合だけではなく、学校生活の節目や行事で歌われてきた。スポーツ競技を詠った歌を集団で歌うという活動がパブリック・スクールで盛んになり、名門と言われる学校に名歌が生まれ普及したことは、教養教育においてスポーツと音楽が結びついた一つの証と言えるであろう。

## 6. 日本の旧制高等学校におけるスポーツ

日本では明治10年代に、欧米のリベラル・アーツ型大学、ドイツのギムナジウム及びイギリス

スのパブリック・スクールをモデルとした学校が創設される。戦後に廃校となった旧制高等学校である。この旧制高等学校の教育と日本の近代スポーツ競技の発達の関係は、旧制高等学校の研究家である高橋佐門の研究に詳しい。高橋は「我が国における近代運動競技の歴史は、大体学生によってその幕があけられたと言えるし、特にその初期の移入、形成期においては旧制高等学校が中心的役割を演じたということが出来るであろう（高橋 1978：341）と述べている。今日、甲子園の出場校と言えは野球選手を特別に育成している高等学校であるが、そもそもこの野球の開拓者となったのが、一高であった。高橋は明治45年発行の『全国高等学校評判記』の文章を引用して、日本に野球の輸入された当時の一高の勢力は、凄まじいものであったが後に早稲田と慶応が優勢となり、明治末期には開拓者としての役目は終わっていたと述べている。一方で陸上競技に関しては、以下のような文章を紹介している（前掲書：342）。

明治時代その一連は一高東大を連ねる線であった。当時は現在の競技会のようなものはあまり行われず、対校競技も各学校の運動会に行われる招待レースが唯一のものであった。その種目は多くの場合、六百米競争で覇者は主に一高であった。大正に入って極東大会の刺激、殊に大正六年の芝浦の大会を機会に、正式の競技会が徐々に頻りに催される様になったが、一高は依然一方の雄であった。

高橋によるとボートやその他の球技も同様の事情であり、一高が学問だけではなく、運動でも優秀であったことがわかる。それは明治期の学校教育において体育重視の政策がとられたこと、一高においては外国人教師による本場の指導が伝えられたこと、一高が全寮制で選手を育成する教育環境にあったことが背景にある。しかし何よりもその教育理念が教養教育であったことが、結果としてスポーツ教育を重視し、効果あるものにしたと考えられる。そして教科ではなく、課外活動も含めた教育が、例えばイギリスのパブリック・スクール等から伝わり、影響を受けたと推測される。

また高橋は、その後旧制高等学校において運動競技が独特な発展を遂げたと論じている（前掲書：342-343）。

学校教育の領域では、智育、徳育と並び体育の部門に属する運動競技・スポーツなのであるが、旧制高校にあっては、単なる個人的な娯楽あるいは修練の域を出て、集団として高校生活を構成する特殊な精神的要素となった。特に一定の競技を以ってする対校試合、インター・ハイ並びにその応援行為は、正に旧制高校の雰囲気等特色づけるに欠かせぬ大きな行為であったのである。対抗戦、インター・ハイは、全校あげての一種の熱狂的祭典であったし、その頂点に立たされる、激しい練習で鍛え上げられた選手団は、さながらこの祭典の祭壇に供えられた花やかな犠牲（いけにえ）であった。明治から大正にかけての時期、昭和に入ってから、その都度応援歌や壮行歌が作られ、年を重ねるを積むにしたがい独特の対抗

戦の雰囲気が盛り上げられ、それに伴う伝統が形成された。そして当の高校だけでなく、学生界一般にも大きな刺激となり、またそれぞれ地元市民の興味と支援も呼んでいた…中略…集团的、非合理主義的、精神主義的な空気によって満たされていた事なのである。

高橋の論考からは、明治から大正にかけての旧制高等学校におけるスポーツ教育が、集团的な精神性育成を目的に行われていたことが読み取れる。これは本稿で既に考察したイギリスのパブリック・スクールと共通するが、さらに高橋は体力そのものを競うのではない武士道的思想が、日本のエリートには流れていて、高等学校の競技の在り方にも影響したと述べている。競技に娯楽的な要素はなく、精神的で、禁欲的で、真剣勝負である。そしてこれらは、対校試合における学校を挙げての応援行為を、独特なものにしていく要因となった。

## 7. 日本における近代スポーツの父F.W.ストレンジ(Frederick William Strange 1854-1889)

一高の学生生活の歴史を集大成した『向陵誌』は全4巻からなり、『向陵誌1巻』には主に校友会の運動部の歴史が収録されている。この記録の中から応援を軸に、各部の歴史を横断的に拾い上げ、資料や情報を補足して再編集したのが『向陵誌：一高応援団史』（1984）である。以下、この著書をもとに考察を進める。

『向陵誌：一高応援団史』によると野球部、短艇部、陸上部という一高の主要三大運動部の創設に関わった人物はストレンジで、「日本における近代スポーツの導入と普及に尽くした“近代スポーツの父”であり“近代スポーツの恩人”である」と記されている（嚶鳴会・一高応援団史編集委員会 1984：35）。ストレンジの生い立ちに関しては、近年の阿部等の共同研究（2009）で明らかにされつつある。

ストレンジは1854年イギリスのデヴォンシャア州の生まれで、多くの資料からは出身校はイートン校、ケンブリッジ、オックスフォードになっている。さらに阿部等はストレンジと弟が1867年～1868年にかけてロンドンにあるユニバーシティ・カレッジ・スクール（University College School）に在学していたことを校友会名簿から確認し、これが日本との接点と推測した。なぜならこの時期、徳川幕府が12人の留学生をイギリスに派遣しており、その中には後に東京大学の総長及び文部大臣となった箕作大六が（1855-1917 後の菊池大麓）当時12歳で、ユニバーシティ・カレッジ・スクールで学んでいたからである。しかし来日の経緯ははっきりしていない。ストレンジは明治8年に横浜に着き、以後、いわゆるお雇い外国教師として、東京大学予備門、第一高等中学校で英語を教えた。肩書は教諭、教師、訓導など、制度とともに変わっている。「本式の課業より外国流の運動を日本に適用したというストレンジな功績がある」（前掲書：35）と東京帝国大学哲学科の三島雪嶺が記している。ストレンジは日本初のスポーツ書 *Outdoor Games*（1883）を著している。

三島は数学の教師であったウイルソン（Horace Wilson）も外国の運動の世話をしたと記している。ウイルソンは明治4年にアメリカから来て大学南校（後の東京帝国大学）のお雇い教

師となり、英語と数学を教えたが、野球を日本の学生に教えた最初の人と言われている。ストレンジはスポーツの中でも陸上競技とボート競技の指導をしており、野球はウイルソンが持ち込み、この3競技が創成期の一高では盛んになったと考えられる。

明治16年（1883）に東京大学と予備門<sup>6</sup>合同の陸上競技会がストレンジの建議と指導で開催され、当時の理学部長菊池大麓が総指揮をとった。これは毎秋本郷で開催される権威のある競技会になり、東京の人々の最も人気ある行事の一つとなった。ストレンジの *Outdoor Games* の発行日がこの競技会の5日前なので、競技会のガイドブックとして書かれたと考えられる。

この翌年の明治17年（1884）、やはりストレンジの指導のもとで、初のボートレース「走舳組競漕会」が隅田川で開かれた。この日、朝から見物人が兩岸につめかけ、来賓は数百名、海軍軍楽隊が参加して音楽を奏した。陸上競技会、ボートレースともに、一高は参加している。ストレンジはイートン校の出身なので、特にボートとクリケットに優れていたが、水陸の競技全般に優れたスポーツマンのようであった。しかしイギリス人のストレンジと、アメリカ生まれの野球との接点は不明である。

ストレンジの人柄やスポーツ観は、直接指導を受けた当時の一高の学生によって伝えられている。ストレンジは英国紳士の典型で、温厚、謹直、謙虚な人柄であった。また明治16年の競技会を前にして職員や生徒に講演を行い次のように述べたという（前掲書：39）

運動は人の獣力のみを練るを目的とせず、吾人の智徳を磨かんが為なり。運動は手段にして目的に非ず、期する所これ以上にあり。運動場における訓育の遙に教室における教化に勝るものあればなり。

スポーツは人格陶冶というイギリスのパブリック・スクールの教養教育の理念と理想は、ストレンジを中心に菊池大麓等、当時の東大や一高の首脳陣によって受け入れられ、学校スポーツの奨励へとつながった。またストレンジに直接指導を受けた学生等が、ストレンジ精神の伝道者となり、スポーツ振興に貢献した。しかし一高にストレンジの理想とするスポーツが根付いたかについては、「しだいに母校の名誉のために勝つことこそが至上の目標となり。絶対の使命となったといえるであろう」（前掲書：39）と記されている。このスポーツ観の変化は、とりわけ一高においては応援の加熱と応援団の行動に顕著に現れてくる。それは全国の高等学校と専門学校に波及した「一高流の応援法」という独特なスタイルへと発展していった。

## 8. 一高の運動競技と応援歌

ストレンジから伝えられたイギリスのパブリック・スクールのスポーツ観が一高において定着したのか、しなかったのか、或いは変容したのか。この問題を探求するために、一高の校友

---

6 東京大学予備門（1877-1886 明10-19）は第一高等学校の前身校である第一高等中学校（1886-1894 明19-27）の前身校

会の運動部や応援において、歴史的に重要な役割を演じた寮歌、運動部歌を選び出し、歌われた機会やスタイル等も含めて考察をしていく。

### 8.1 『寮歌集』の寮歌、部歌、応援歌の概観

一高の『寮歌集』（2004 a）には、毎年、の記念祭に作られた寮歌の他に、「部歌・応援歌・頌歌 他」という項目があり、41曲収録されている。うち運動部部歌は31曲で、内訳は端艇部15曲、野球部4曲、水泳部3曲、庭球部2曲、柔道部2曲、弓術部2曲、撃剣部1曲、陸上運動部1曲、四部合同（端艇、野球、庭球、陸上運動）1曲で圧倒的に端艇部が多い。一高の部歌のほとんどが運動部の歌であるが、その中でも多くの割合を占めているのが端艇部の歌で群を抜いての数である。運動部部歌から、ストレンジと歴史的に関わりが深い陸上部の部歌と、曲数も多くチームで試合をする端艇部と野球部の部歌、声援が模範的と評された柔道部の部歌に関して、各曲の基本情報を一覧にした（表1）。

### 8.2 端艇部—応援の始まり〈花は桜木人は武士〉

ストレンジの提唱で東大に帝国大学運動会という組織が作られたと考えられるのが明治19年で、そこから分離した形で第一高等中学校が校友会を組織したのが明治23年である。文武両道の理念のもと、運動だけではなく文芸、弁論なども組織された。最初の校友会会則を読むと、その目的が文武の奨励であり、選手の養成ではないことは明らかである。

ストレンジの指導のもとに開催された競技会で、応援が行われたのか、応援歌のようなものが歌われたのかは不明である。考証を経て編集された最新版の一高の『寮歌集』（2004 a）に収録されている、最も古い歌は明治23年（1890）の端艇部部歌〈花は桜木人は武士〉である。既に拙論「寮歌の形成過程と文化的背景：『花は桜木』から『都ぞ弥生へ』」（2013）で述べたが、隅田川で行われた東京高等商業学校（現一橋大学、以後高商と記す）とのボートレースの前夜に自治寮の初代委員長の赤沼金三郎が作詞をし、寮生に歌唱指導を行って誕生した。このレースは、ストレンジのもとに始まった競技会の流れを汲む帝大運動会の春季競漕の招待レースの第4回大会であった。『第一高等学校寄宿寮寮歌解説』（2004 b）によると、一高クルーが4連勝をとげ、全寮生の声援隊は狂気して勝利を祝い、以来この歌は他の運動部の対外試合や行事の締めくくりとして歌われるようになった。いわばこの歌が校歌の役割を担ったわけである。校歌のない一高を象徴する名寮歌〈嗚呼玉杯に花うけて〉に、校歌の役割を譲るのは明治40年代とも、大正中期以降とも言われている。

歌詞に注目してみよう。5・7の句で1節、全48節からなるこの歌は、内容的に大体3部に分かれている。前半部は「武士の魂いそなえたる、一千人の青年が國に報ゆる其誉」「高き高等学校の誉は世にも並びなき」と武士道精神や一高生としての誇りを詠っている。中間部は「月日に励む腕力の、銃剣柔術銃鎗や、ベースボールにボート會、ボートの會の競漕は、特に優れて花々と」と運動競技とボートのことになり、とりわけボートの優越性が詠われる。そし

て後半部では「時刻移りて号砲の、鳴ると同時に漕出す」「山をなしたる観客は、両手に汗を握りつつ」と競技の実況中継である。

ボートの歌に、精神を詠いこみ、学校を代表する歌になっていくプロセスは、イートン校の“Boating Song”と類似している。ストレンジはこの競技会の前年に亡くなっているが、イートン校出身のストレンジからスポーツ歌の意義や役割が伝わった可能性は考えられる。

この一高対高商のボートレースは、応援団の小競り合いなどもあり、警視庁が非番巡査を動員して警戒にあたらせたほどの熱狂ぶりであった。警視総監から両校に厳重な警告が発せられたことや、高専の学生が練習のために授業を欠席することを大学側に認めさせようとした事件も発生し、一高対高商のボートレースは禁止となった。

6年後の明治29年（1896）に復活し、第5回レースが行われたが、その時の応援の熱狂ぶりが『校友会雑誌』第56号で伝えられている（前掲書：50）。

…柏葉の紋所染め抜きたる旗印押し立て、番号打たる小旗の順序に、櫂の調子勇ましく、潮花蹴立てて、二十五の軽艇漕ぎ連ねてぞあらはけれる。…中略…艇隊分かれて東西南北の四隊となり、待乳、綾瀬、梅若、吾妻橋各々其旗艇たり。…中略…一艘の大船黒烟を漲らし怒涛を蹴て進む後には、三十艘近き軽艇大旗小旗を南風にひるがへし、墨田の江心を真一文字に駛走しける。…中略…堤上堤下喝采湧くが如く、楽声洋々として一層の盛観を添う。陸上の一隊は野球部員を先鋒とし、艇隊と相応じて運動を起こしぬ。…

応援艇隊が隅田川を華やかに行き来し、岸では野球部員が体を張って応援するといった、騒々しいショーが繰り上げられた様子がうかがえる。レース後は〈花は桜木〉を高唱しながら寮へ引き上げ、選手から寮友への声援の謝辞がなされ、祝勝の宴が開かれた。この宴には、仙台から上京し、舟を借りて水上から応援をした第二高等学校の学生も加わったという。この後、一高対高商のボートレースは再び禁止となる。応援団の衝突を恐れた主催者側の自衛措置とも言われている。明治31年（1898）に二高から一高に赴任した沢柳政太郎校長は「…従来行われつつあった遊戯上競争或いは種々の弊害生ず。余は端艇部に於いて各部の競漕は今後之を廃することを欲す」（前掲書：53）と対校競技に反対を表明していた。

しかし復活の声が多く、明治32年（1899）に第6回目の一高対高商のボートレースが開催された。声援隊はより大袈裟に計画された。総指揮官の学生が、声援隊の編成一水陸に分かれ、水上声援隊は7艦隊にわかれ、陸上声援隊は4つに大別する等一と、声援の方法を説明した。800人もの寮生が参加したという。一高の休息所は白髭社境内に設けられ、ここで応援歌、凱歌の印刷物が配布された。狩野亭吉校長は「声援は盛んに行うべし。既に敵と対せる以上は必勝を期せざるべからず。然れどもその声援たるや、我が一高男児の声援たるに恥づるなきを期すべし」（前掲書：55-56）と訓示している。

第6回目のレースも僅かの差で一高が勝利した。閉会式では狩野校長が「われわれはその勝

敗の如何を問うものではない。これによって両校学生の親善を助けるのみならず、体育に貢献するところが少ないと信ずる。希しくはこの親交を保ち相共に励もうではないか。謹んで本会の無事終了したことを祝したい」（前掲書：57-58）と述べた。この後、両校生徒が共に声を合わせて一つの歌を歌ったことが、『一高応援団史』には「特記すべきこと」として書かれている。そしてその歌詞は掲載されているものの、「この歌が当時どのように歌われていたものか全くわからないが、高校の対校試合に両校の生徒が“君が代”以外に一つの歌を合唱したことは、恐らく空前絶後であろう。あえて歌詞を記す」と書かれ、歌詞のみ掲載されている（前掲書：58）。

隅田の岸に春たけて 面すずしく吹く風に 花の白雲とくはれて 見渡す限りはてもなく  
…以下省略

しかし、このレースが最後になった。狩野校長は一高の対外試合全般に反対意見するようになり、明治32年以後、対校試合は禁止される。声援隊が大掛かりになり、費用、労力、警察を動員する警備等が原因と考えられたようだ。

### 8.3 模範の声援—明治32年の対二高戦

では理想とされる応援とはどのようなものであったのだろうか。『向陵誌：一高応援団史』では、応援に相当する行為は明治時代は「声援」と呼ばれており、「模範の声援隊」（前掲書：65-69）という項目がある。それは狩野校長が高く評価した二高との第2回目の試合における声援の態度であった。

明治32年2月、一高の柔道部が二高に挑戦状を送り3月に応戦を受け、翌月今度は二高野球部から挑戦状が届き一高は応諾した。これは最後となった一高対高商のボートレースの直前のことである。4月7日朝、選手と声援隊の出発を送るために、寮生600人が校庭に集合、選手を囲んで万歳を唱え、三隊に分かれ、送別隊は停車場まで行進していく。選手30人声援隊120人が列車に乗り込み、深夜に仙台駅に着くと、先発隊と二高の有志が出迎えた。

翌日の試合は、野球では二高が勝利し、柔道では一高の勝利であった。その夜の9時半から五柳園で両校の学生350人による大懇親会が開かれた。突如、軍装の赤沼金三郎講師が現れて、座は盛り上がり、「高唱相和し、和気龍々のうちに11時半散会した」とある（前掲書：65）。翌早朝、選手と声援隊は、二高有志に見送られて仙台を出発、夜に列車が上野に着くと「迎第一高等学校諸君」の旗のもと、400人が整列して万歳の中、選手を迎えた。寮に向かって行進すると「選手を迎える歌」が歌われた。校庭では爆竹が鳴り、火花が飛び、凱歌が歌われた。指揮の生徒から選手の奮闘と生徒の静粛、勤厚が報告され、狩野校長は選手と応援団を迎えて、次のように述べた（前掲書：66）。

…たとえ勝つも負けるも、男らしく、丈夫らしく、天に愧じず、地に恥じず、正々堂々の陣をはり、以て競技の何ものなるかを他に示し、…選手諸君が仙台に赴き、よくその模範を天下に示されたことは欣快に耐えぬ…。

試合の際には、選手の何倍もの生徒が声援隊という応援団となり、遠征に同行し、試合の前後に行われるセレモニーに参加すること自体は、問題にされていなかった。それどころか声援隊は無くてはならない重要な役割を果たしていたことがわかる。狩野校長の言葉に表れているように、勝敗に執着し、節度をわきまえない応援のスタイルが問題視されたのであろう。どのような歌がどのように歌われたのかは、記録からはわからない。しかし今日の式典や甲子園の勝利校が校歌を歌う直立不動の歌唱スタイルが良しとされ、声を張り上げ、太鼓を叩き、身振りをするようないわゆる「今日の応援団スタイル」のものは恥ずべきとされていたことが窺われる。

#### 8.4 柔道部部歌

この対二高戦を最後に対外試合は禁止される。それが復活したのが明治43年で、この時選手の生徒によって作詞されたのが〈時乾坤のうつろひに〉である。柔道部の歴史や、これから挑む試合への心情や決意が詠われているが、第3節の「青葉城下の席の聲」で、模範的な声援と評されて勝利した明治32年の対二高戦の試合が歌詞に詠まれているのは注目に値する。

柔道部部歌は2曲しかない。明治23年の校友会設立時から存在した歴史ある部であったが、修練を主眼とし、対外試合を積極的に行わなかった。明治31年に二高からの挑戦状を野球部と共に受けて以来、大正7年（1918）まで対二高と5回、対高専と2回対校試合を行った。しかし二高の校長と一高の教授会の対外試合禁止の措置を受け、大正10年（1921）より対外試合を一切とりやめ、その目的を「精神と人格の鍛錬」とした活動に切りかえた。もう1曲は最後の試合の前に作曲されたと考えられる〈仇敵北に壘して〉である。二高に連敗した雪辱を遂げようという気概と勝利への期待が謳われている。曲は明治38年（1905）記念祭寮歌〈平沙の北に〉となっている。柔道部の部歌が試合禁止後に全く作られていないことは、対校試合と歌が大きく結びついていたことの証と言えよう。

#### 8.5 野球の対校試合と応援の激化

野球部も校友会設立時から存在した歴史ある部であり、その歴史は日本における野球の黎明期の歴史でもあった。二高、三高（第三高等学校）等官立の高校だけではなく、学習院、早稲田、慶応等の私学との対校試合を行った。また野球を国技と誇るアメリカチームとの試合も行い、無敵と言われるほどの強さを誇り、校技と自負していた。多くの試合が行わる中で、応援は重要な役割を担った。声援が応援へ、そして応援団という組織へと発展していくのは、野球の試合の歴史と重なる。野球部には4曲の部歌があるので、各歌に沿って、その歴史を辿って

みたい。

・明治36年（1903）〈天地の正氣向陵に〉（譜例3）

国内無敵となった一高野球部は、横浜のアマチュアクラブというアメリカ人のチームに挑戦状を送ったが、初めは「野球は国技」と相手にされなかった。やっと挑戦に応じたのが明治29年で、以後明治37年（1904）まで外国人チームとは13回の試合が行われ、大差で11勝している。この間、学業優先から渡米を諦めたが、イエール大学（Yale University）からも挑戦状が送られた。

明治29年の様子は初の国際試合でもあり『校友会雑誌』に記され、応援の様子も詳しく述べられている。第1回戦は5月23日で、試合当日は寮生400余りが新橋駅から横浜へ出発、東京の他の学校の生徒も合流し、横浜居留地のグラウンドに入場し、左右に排列して開始を待った。『向陵誌 一高応援団史』には『校友会雑誌』からの引用が載っている（1984：83）。

弥次の来り声援する者実に四百余、正々堂々として其の陣乱れず。或いは敵軍撰手の奇行に喝采し、或いは我が撰手の奮闘を弥す。

この試合は、単に一高の勝利というより邦人の勝利と讃えられただけではなく、横浜の英字新聞も一高の勝利を絶賛して報道した。

続く第2戦は翌6月5日で、横浜アマチュアクラブは、寄港中の軍艦チャールストン及びデトロイト号の乗員から精鋭が選ばれた。試合は新聞で予告されたこともあり、万の観衆がグラウンドの柵外に押し寄せたという。32対9で大勝利となる。第3回戦は7月4日の独立記念日で軍艦デトロイト号からの挑戦に応じ、またもや大勝した。明治36年には米艦ケンタッキー号の乗組員を迎え撃ち、27対0のスコンクで大勝した。この年に作られたのが〈天地の正氣向陵に〉である。第1節は歴史、第2節は猛練習、第3節は国内無敵の実績、第4、第5節は、アメリカ人チームとの対決が詠まれている。

・明治41年（1908）〈古都千年の夢つゝむ〉

明治41年4月8日に行われ三高戦に勝利した際に作られ、前日に応援団が猛練習した記録がある。この凱歌は「一般学生からなる応援団にも愛唱された」（2004 B：717）。一高対三高の試合は、明治39年から昭和23年（1948）まで38回行われ、その第1回の明治39年の試合は、三高が東上して4月6日に一高のグラウンドで行われた。三高の校友会誌『神陵』第3号に詳述された応援の様子が『向陵 一高応援団史』に転載されている（前掲書：96）。

…一高の応援団一団という名称は少しよすぎる一弥次の群れと名付ける方がふさわしいかも知れぬ。ネットの裏は、石油缶にこいしを入れた無数の雑音響と白旗の乱舞、三塁近くは

柔・剣道の猛者が間余の青竹をめいめい持って屯している。ゴロが来ると、この竹で地面をたたいて砂煙をあげて、初舞台のこの僕を、へこませようという算段。三高の応援といえば春の休暇に東京に帰省した十数人。それを一塁後方に早稲田の十数人が有名な吉岡將軍の音頭で三高のために声援を送っている。

明治20年代から始まった一高の声援隊は、次第に組織だって、30年代半ばには応援隊と呼ばれるようになり、大正中期からは応援団となった。しかし一高の応援は批判的であった。『向陵 一高応援団史』には次のように記されている（前掲書：101）。

一高応援団の本質は、一貫して野次隊であった。愛寮、愛校の精神の上に築かれた同志的団結は固く…その発するところは、むしろ、敵を野次り、罵倒し、動揺させ、錯乱することに終始した。脳裏にはつねに源平の合戦があり、道具立ても大時代がかった旗さしものに陣太鼓、法螺、巨大なのぼり、幾百の白の旗に加えて、金だらい、石油缶、竹棹、シーツ。時には消化用のポンプやホースまで動員した。

この応援スタイルは、市民からは非難され、新聞では酷評されたが、全国の学校に波及し、エリート一高生のいわゆるバンカラなパフォーマンスが、天下の名物となっていった。当時文芸部員だった和辻哲郎は『校友会雑誌』に「精神を失ひたる校風」という論文を発表し「豪傑的態度と秋の駒場と春の隅田と向陵尚武の気と、而して野球の勝敗のみが校風の主要部分となるに至っては、吾人絶対に反抗せざるべからず」（前掲書：105）と批判した。

明治41年（1908）に一高は初めて京都へ遠征して三高と戦った。この時、東大寄贈歌〈としはや已に十八と〉（青木得三作詞、鈴木充形作曲）が、鼓舞激励する壮行歌として、音楽隊によって披露された。

・大正12年（1913）〈正氣あふるゝ向陵の〉

明治30年代半ばから、学習院、早稲田、慶應、三高対校戦が始まり、この様子を詠った歌である。作曲は珍しく生徒ではなく弘田龍太郎である。一高が外国人チームとの試合に熱心になっている間、早稲田と慶應が力をつけ、早稲田はアメリカに遠征して技術を磨き、最新の道具を持つようになった。早慶戦が野球界の一大イベントとなり、応援の仕方も変化していった。応援団が正式に組織され、斉唱で味方を激励する方式が始まった。応援団を拡充したものの応援歌のない慶應は明治35年（1902）に唱歌教科書に掲載された〈ワシントン〉（作詞不明 作曲 北村季晴）の替え歌で〈天は晴れたり気は澄みぬ〉（明治40年 作詞 桜井弥一郎 作曲 北村季晴）を応援歌として、紫の三角旗を振って熱唱した。

・昭和7年（1932）頃〈嵐が丘に巢籠もれる〉

この歌は第7節の「榮譽は古りし四二」から、創部の明治23年（1890）から数えて昭和7年頃と推定される。『第一高等学校寄宿寮寮歌解説』によると作詞の平木恵治は教員を経てから一高に入学した年長の生徒で、教養高く、短歌をし、スポーツ好きで野球部のマネージャーを務めた名物男だった。「凝った表現を展開しているものの、野球部の活動そのものや、その伝統的精神などには一切触れず、単に抽象的な思想、観念を詩語を用いて表出しているだけなので、運動部の部歌としての特色も魅力も皆無とってよく、野球部部員すら本歌は全く無視し…」（第一高等学校同窓会 2004 b : 714）と酷評され、もっぱら〈天地の正氣向陵に〉と〈正氣あふるゝ向陵の〉が部歌、応援歌として歌われた。

## 8.5 一高の部歌と応援歌の特徴

以上主に、端艇部、柔道部、野球部の部歌の作曲背景と応援の様子を、『向陵誌 一高応援団史』の記録から考察した。部の歴史や誇りとともに、愛校心や団結、過酷な練習の忍耐、また試合の記録も部歌に詠まれていた。内容的には高潔であり、イギリスのパブリック・スクールのスポーツマンシップや人間形成と共通していると考えられる。しかしその実践、つまり応援のスタイルは、勝利に拘り、敵をやっつけるという、非紳士的で、野蛮なものへと変容していった。試合禁止となった柔道部で歌が作られなくなったことが、部歌の目的が対校試合にあったことを物語っている。

大正7年（1918）に当時早稲田の野球部部長安部磯雄が一高応援団の蛮行を批判し、応援団なしでの試合交渉をしてきた。安部の運動競技観は「運動は全く学生の遊戯」であった。しかし一高をはじめとする旧制高等学校は異なっていた。運動競技は武士道的思想を受け継ぎ、精神性が重視され、選ばれし者の真剣勝負に娯楽的な要素などなかった。この運動競技観が対校試合における応援行為を、声援や応援歌の斉唱では済まされないものへと変容させていった。

一高では対校試合だけでなく「組選」といって、内部での対校試合も年中行事があり、寮生の親睦に貢献した。しかし対校試合が盛んになると、運動部が独自の設備を要求し、運動部屋の制度が確立した。それに伴い、その他の部も部室を持って割拠するようになると、運動部と文化部、一般寮生に離反が始まり、対立が生じるようになっていった。多くの歌が寮生から生み出され、応援歌として歌われ、全国に普及した一高であるが、スポーツと文化の共存による教養教育は、必ずしもうまくは行っていなかったのである。

## 9. まとめと結論

本論ではオリンピックが元来は人間形成という教養教育の考えのもと、スポーツも文化も競技として行われていたという歴史的な事実を背景に、まず近代オリンピックの祖であるクーベルタンが影響された19世紀のイギリスのパブリック・スクールに、教養教育におけるスポーツと文化活動としての音楽の在り方を探求した。

イギリスのパブリック・スクールではスポーツは教養教育の中で重視されていた。それは中

世からの粗野で原始的で娯楽目的の大衆の運動に、ルールをもたせ、人間形成としての教育価値を見出すことから始まったと言える。それに伴い、その精神を詩に詠み込み、集団で歌うという活動が起こり、スクールソングの発生と発展を促したことが明らかにされた。

日本は一高を主な例として考察した。イギリスのパブリック・スクールを範として創設された一高では、その黎明期はイートン校出身の指導者ストレンジの影響もあり、人間形成としての運動観が伝えられた。部歌の詩の内容を考察しても、それは明らかである。しかし対校試合が盛んになると、真剣勝負という精神性は“相手を負かして勝つこと”へと変わっていった。それは歌詞に表れずに、応援の仕方に表れた。蛮行とも言えるほど、大掛かりで相手を威嚇するような応援団の発達は、愛校心と団結心の証でもあった。

現在日本では甲子園の勝利校が校歌を歌う時は、直立不動の儀礼的な歌唱スタイルである。しかし一方で多くの大学には応援団結成され、応援歌は音楽的とは程遠いパフォーマンスで歌われる傾向にある。精神性の高い内容の歌詞を歌いながら、その歌唱や応援のスタイルは必勝の雄叫びと、各校のアイデンティティの表明というよりは、見世物的な顕示となっている例もある。スポーツによる人間形成という理想は応援という実践によって乖離してしまったのだろうか。これはオリンピックがクーベルタンの理想と離れてしまったのと、通じるところがあるのではないだろうか。

今後の課題であるが、戦前の日本の旧制高等学校と大学における応援活動をより詳細に検討したい。応援の場で歌われた歌の成立背景、パフォーマンススタイル、伝播について調査することにより、戦前の日本の音楽文化に“スポーツに関わった歌”がどのように影響したのかを、明らかにしていきたい。

(本学准教授 = 音楽教育担当)

## 参考文献

### 日本語論文及び和著

阿部 生雄、高橋 孝、渡辺 融

2009 「(シンポジウム報告) F.W.ストレンジ像の再構成：生い立ちと業績」  
『体育史学会』26号 53-58

池田 清

1949 『自由と規律-イギリスの学校生活-』(岩波新書：東京)

一高同窓会

2004a 『寮歌集』(一高同窓会：東京)

一高同窓会

2004b 『第一高等学校寄宿寮寮歌解説』(一高同窓会：東京)

第一高等学校寄宿寮

1937 『向陵誌』(第一高等学校寄宿寮：東京)

嚶鳴会・一高応援団史編集委員会

1984 『向陵誌 一高応援団史』(一高同窓会：東京)

オリンピック委員会

2018 『オリンピック憲章』(日本オリンピック委員会：東京)

鈴木 秀人

2004 「『トム・ブラウンの学校生活(1857)』の再検討：トマス・アーノルドのスポーツについての考え方を知る資料として可能性」『東京学芸大学紀要』  
第5部門 芸術・健康・スポーツ科学/56号 43-53

高橋 佐門

1978 『旧制高等学校研究 寮歌・校風論篇』(昭和出版：東京)

高橋 佐門

- 1984 『資料集成 旧制高等学校全書』[第7巻生活教養編(2)]  
(旧制高等学校資料保存会:東京)

土屋 靖明

- 2015 「トマス＝ヒューズ『トム＝ブラウンの学校生活』(1857年)にみる英国パブリックスクールにおける西洋古典教育の様相について—トマス＝アーノルド校長の姿勢にも着目して—」『滋賀短期大学研究紀要』40号 23-36

ヒューズ・トマス

- 1952 『トム・ブラウンの学校生活』前田俊一訳(岩波文庫:東京)

秦 修司

- 1991 「英国におけるフットボールの歴史に関する研究(3)」  
『金沢大学教育学部紀要』教育科学編2巻/40号 269-282,

藤井 翔太

- 2010 「近代イギリスにおけるフットボール審判員制度の歴史的変遷」  
『スポーツ史研究』23号 13-26,

プラトン

- 1979 『国家』藤沢令夫訳(岩波書店:東京)

堀内 敬三・井上 武士

- 1958 『日本唱歌集』(岩波文庫:東京)

ローラント・ナウル

- 2016 『オリンピック教育』(大修館書店:東京)

洋書

Harrow School

- 1905? *Harrow School song book 21ed.* (Harrow School book shop)

Hughes Thomas

- 2019 *Tom Brown's School Days* (Independently published)

Mangan James Anthony

2000 *Athleticism in the Victorian and Edwardian Public School*  
(Routledge New York)

Nevil Ralph

1911 *Floreat Etona Anecdotes and memories of Eton College* (Macmillan: London)

インターネット

笹川スポーツ財団

n.d. 「スポーツの歴史」 <http://www.ssf.or.jp/history/essay/tabid/1105/Default.aspx>

Eaton College

n.d. <https://www.etoncollege.com/Music2.aspx>

Harrow School

n.d. <https://www.harrowschool.org.uk/Music>

Rugby School

n.d. <https://www.rugbyschool.co.uk/school-life/school-life-academic/subjects/music/>

応援部三田会

n.d. 「慶應義塾大学応援指導部75年通史」 <http://k-o-m.jp/history/1-1.html>

【表1】 一高『寮歌集』(2016)収録の端艇部、野球部、柔道部、陸上部の部歌一覧(筆者作成)

端艇部

発表年	歌詞第1節	歌の種類	作詞作曲	詩内容等
明治23年	花は桜木 人は武士	応援歌	詞 赤沼金三郎 曲 不明(兵隊節)	志気、端艇部の優越、風物
明治34年	戊戌の昔 残したる	遠漕歌		道行文、猛練習の苦しみ
明治42年	春は春は	一高民謡	御手洗文雄	心意気、民謡風
大正9年	嗚呼向陵に 正気あり	応援歌	詞 今井常一(端艇部) 曲 矢野一郎(撃剣部)	志気昇揚、闘魂喚起
大正9年	ああ我勝ちぬ 白勝ちの	祝勝歌	不明	対三高戦の祝勝
大正11年	紅香ふ 朝霧に	遠漕歌	詞と曲 千葉四郎(端艇部)	風物詩
不明	マーナンジャ エー	民謡風	不明	風物詩
不明	一つとせ	数え歌	詞 千葉四郎(端艇部) 曲 不明	猛練習の苦しみ
不明	體がデッカイ ばかり	不明	詞 千葉四郎(端艇部) 曲 不明	選手生活をユーモラスに表現
不明	一つと出たわ いな	数え歌 (遠漕歌)	詞 千葉四郎(端艇部) 曲 〈牛若丸〉	遠漕の経験、風物詩
不明	あ、愉快なり 愉快なり		詞 不明 曲 軍歌〈勇敢なる水兵〉	
不明	漢の高祖	民謡	不明	志気、団結

野球部

明治23-42 年頃	嵐が丘に 巢籠もれる	祝勝歌	詞 平木恵治(部マネージャー) 曲 鈴木充形	抽象的思想 観念
明治36年	天地の正気 向陵に	応援歌	詞 山内冬彦 曲 楠正一/大塚巖/山脇 正吉	部史、猛練習、無敵の誇り、 アメリカ人チームとの試合 実績
明治41年	古都千年の 夢つゝむ	凱歌	詞 田中木又 曲 広田守信	対三高戦の実況 勝利の気概と自負
大正12年	正気あふるる 向陵の	応援歌	詞 深田久彌 曲 弘田龍太郎 (作曲家・楽友会指導者)	志気、犠牲的精神

柔道部

明治43年	時乾坤の うつろひに	凱歌	詞 小林俊三(柔道部) 曲 新居一郎	試合への意気込み 二高との試合の思い出
大正4年	仇敵北に 壘して	部歌	詞 久能木愼治 曲 「平沙の北に」の譜	勝利への気概と期待

陸上運動部

明治42年	柏の旗の 行くところ	祝勝歌	詞 吉上庄亮 曲 日疋誠	気概 団結
-------	---------------	-----	-----------------	----------

# Forty Years On.

E. E. B.

1872.

J. F.

VOICE.

For-ty years on, when a - far and a-sunder Parted are those who are singing to-day,

ACCOMP.

*p*

When you look back, and for-get - ful-ly wonder What you were like in your work and your play,

Then, it may be, there will of-ten come o'er you, Glimpses of notes like the catch of a song—

*p*

CHORUS.

Visions of boyhood shall float them before you, Echoes of dreamland shall bear them along, Follow

up! Follow up! Follow up! Follow up! Follow up! Follow up! Till the field ring again and a -

*p* *f*

# BOATING SONG

WILLIAM CORY

ALGERNON H. DRUMMOND

Tempo di Barcarola

The musical score is written on a single treble clef staff in 6/8 time. It begins with a dynamic marking of *mf*. The melody is simple and rhythmic, with lyrics printed below the notes. The lyrics are: "Jol - ly boat - ing weather, And a hay har - vest breeze, Blade on the fea - ther, Shade off the trees, Swing, swing to - ge - ther, With your bo - dies be - tween your knees, Swing, swing to - ge - ther, With your bo - dies be - tween your knees. Rug-by may be more cle - ver, Har-row may make more row, But we'll row for ev - er, Steady from stroke to bow, And no - thing in life shall sev - er The chain that is round us now, And no - thing in life shall se - ver The chain that is round us now." The score ends with a double bar line.

Jol - ly boat - ing weather, And a hay har - vest breeze,  
Blade on the fea - ther, Shade off the trees,  
Swing, swing to - ge - ther, With your bo - dies be - tween your knees,  
Swing, swing to - ge - ther, With your bo - dies be - tween your knees.  
Rug-by may be more cle - ver, Har-row may make more row, But  
we'll row for ev - er, Steady from stroke to bow, And  
no - thing in life shall sev - er The chain that is round us now, And  
no - thing in life shall se - ver The chain that is round us now.

*JB Wortley*

野 球 部 部 歌

山内冬彦 作詞  
 楠正一・大塚巖・山脇正吉 作曲

てんちのせいきこーりよーに  
 こもりてここにじゅーにねん  
 そのはるあきにーみがきこし  
 ぶんぶのみちはーかずあれど  
 こーとにすぐれしやきゅーぶの  
 ほまれはよよにつきざらん

- 一、天地の正氣向陵に  
 その春秋に磨き來し  
 殊に勝れし野球部の
  - 二、彌生ヶ岡の春の夕  
 向ヶ臺の冬の朝  
 雨に嵐に練習の
  - 三、風雲いかる校庭に  
 紺の袖の一觸に  
 覇者の譽の年々に
  - 四、名も勇しきケンタツキー  
 風切るバット勇猛の  
 兜を脱ぎて陣門に
  - 五、懸軍十里南濱に  
 國技に誇るアマチュアの  
 物も見事にスコックの
  - 六、あゝ名譽ある吾部史よ  
 此武威永く地に墜ちず  
 太平洋のかなたまで
- 籠りてこゝに十二年  
 文武の道は數あれど  
 譽は世々に盡きざらむ
  - ノックの響雲に入り  
 霜を碎きて球競ふ  
 苦心を積みし年月や
  - 寄來る敵は多けれど  
 物も言はさで逐ひ返し  
 上り行くこそ嬉しけれ
  - ヨークタウンやデトロイト  
 軍艦勢も力盡き  
 降りしさまぞ哀れなる
  - 勇み振ひて進み行き  
 亞米利加人と戦ひて  
 勝どき擧げし様を見よ
  - あゝ光榮の十年よ  
 いやゝ光を打ち添へて  
 吾部のほまれ輝かせ

明治三十六年